

# ともしび

セルマ・ラーゲルレーブ原作

村上進 翻案

一

いくとせかのむかし、フィレンツェの町がやつと共和国になつたばかりのころ、そこにラニエロ・デ・ラニエロとよぶ一人の男が住んでおつた。ラニエロは無双の強力者で、鋼のよろいも絹の衣をまとうが如し、と噂されておつた。ケンカがなによりも好きで、どこかで争いの声が聞こえればいてもたつてもいられず、飛び出していつて誰彼となくなぐりつけ、その双方をのしてしまう事に無類の喜びを感じるような男であつた。

ある日ラニエロはたわむれに射的を始めた。ラニエロの上達はめざましく、程なく吊るした的は残らず打ち抜くことが出来るようになった。そこでラニエロはなにか動く的がほしくなり、妻がかわいがつていた小鳥をみな籠から解き放ち、それを残らず打ちおとして仕留めてしまった。妻のフランチェスカはそのことを知ると、顔色を変えてラニエロを見つめた。がしかしラニエロのほうは自分の射的の腕前を自慢するばかりであつた。

さて時の権力者たちは東方への勢力拡大を狙い、イスラムの国々への攻撃の大義名分を探しておつた。エルサレムにあるキリストの墓の奪還は、その格好の口実となつた。こうして十字軍が結成され、遠くエルサレムへ侵攻すると聞いてはラニエロの血が騒がぬはずはなかつた。

ラニエロはうわさにたがわずめざましい活躍をなすとげ、ついにエルサレムが陥落した夜、戦いの一番の功労者としてキリストの墓の聖なるともしびから、自分のろうそくに火を移す栄誉を許されたのであつた。

二

さて、エルサレム陥落の夜、兵士たちは酒場で勝利の酒に酔いしれておつた。しかし異教徒の占領から解放されたはずの町の民は、兵士たちほど陽気ではなかつた。無理もない。あるものは家を焼かれ、あるものは幼子を、あるものは年老いた両親を、この戦で十字軍の兵士たちに殺されたのであつた。酒場のあるじは小さくつぶやいた、早く引き

揚げてほしい、戦争はわたらの生活をめちやめちやにしまった。」これは人々の本音であつた。しかしラニエロはそれを聞きとがめた。

「なんだと？自分で戦うこともしない腰抜けが何を言う！俺たちは大切なものを守るために命を賭けて戦つただ。」ラニエロはいきり立つた。しかしあるじは答えた。軍隊はただ殺戮と略奪をくりかえすのみだ。なにも守りはせぬ。お見受けしたところお前さんは、そのろうそくのともしびが吹き消されぬよう、やつきになつて守つておられるようだが、天幕の外ではそのかよわい火を「睡守り通すことすらできまい。」

ラニエロは挫折をいちども味わつたことのない男であつた。自分の力と勇気があれば、出来ない事は何もないと信じて疑わなかつた。酒場のあるじにけしかけられてラニエロは大声で誓つた。俺はこのともしびを、フィレンツェまで消さずに持ち帰り、大聖堂のマリヤさまの前のろうそくにともすのだ。」

もはや誰一人口を開くものはなく、酒場は沈黙が支配していた。

## 三

あくる朝早く、ラニエロはともしびを胸の前に掲げ、マントを着て馬にまたがり、颯爽と陣営を出発した。馬の両脇にはふた抱えもある替えのろうそくの束がくくりつけてあつた。ところが町をでて山道にさしかかると、ともしびはわずかの風にも揺らぎ、消えそふになつた。ラニエロは馬からおりてすこし思索すると、後ろ向きにまたがり自分の体とマントで風をよけながら歩みを進めた。

さびしい山道に馬を進め、ふと気がついてみるとラニエロはこのあたりで悪名高い山賊に取り囲まれておつた。普段のラニエロであれば、十二、三人の山賊を蹴散らすことなどぞうさもないことであつた。が、このともしびを打ち捨てぬ限りそれは出来ない相談とさつたラニエロは、山賊どもに向かつて言つた、俺とまともに戦うならば、そちらにも相当の覚悟がいるだろう。しかし俺はある約束にしばられているから、今戦いたくはない。このともしびとろうそくの束に手をつけぬと約束してくれるのなら争わずにほしいものを取らせよう。」山賊たちはこいつは手ごわいだろうと予想していたので、この申し出にホクホクのものであつた。よろいを取り、武器をとり、金を取り、馬を取つた。そうして自分たちの乗つてきた馬のうち、一番よぼよぼの馬を代わりに捨てて行つた。

ラニエロは初め、港まで出たら船でフィレンツェにもどるつもりであった。しかし無一文になってしまった今は、道々で巡礼の旅人に替えのろうそくや食べ物を恵んでもらいながら山を越え、陸伝いに旅をするより他になかった。それはながいながい、つらい道のりであった。このか弱いともしびは、ほんのひと時ですらラニエロに安らぐ時をあたえてはくれなかった。ただひとしずくの雨、一陣の風でも、この火を消し去ってしまうに違いない。

あるときはあまりの暑さに、ラニエロは灌木の茂みのなかに身を横たえて眠っていた、ともしびはそばの二つの石の間に立ててあったが、ラニエロがすっかり眠りこけている間に雨が降り出した。雨はかなり長く降り続きラニエロの頬をぬらしても、疲れ果てたラニエロは目を覚ます事はなかった。ようやく目覚めて飛び起きた時、まわりの土はすっかり濡れており、ともしびが消えてしまったと思うとラニエロは恐ろしさにそちらが見られないほどであった。

けれどもろうそくは、雨のさなかにもしずかに音もなく燃えていた。そしてラニエロは、これは二羽の小鳥がともしびのすぐ上でくちばしをすり合わせ、羽をいっぱいひろげて飛び続けていたおかげだときとつた。ラニエロはすぐに帽子をともしびにかぶした。そしてかわいさのあまり小鳥たちに手をさしのべた。すると小鳥は逃げようともせずラニエロの手にとまった。小鳥たちが自分を怖がらないのがラニエロにはいかにも不思議だった。けれどもラニエロは思った。さうだ、俺はかよわい中にも最もかよわいものを守ることしか念頭にないのを、小鳥たちも知っているから、それでこの俺をこわがらないのだ。」

ある日、高い山あいのさびしい道で一人のイスラムの女があとを追ってきて、ろうそくの火を貸してほしいと頼んだ。うちの火が消えて、子どもたちがひもじがっております。どうか、その火を分けてください。かまどをたきつけて、パンを焼いてやりますゆえ。」女はろうそくに手をのばしかけたが、ラニエロはそれを遠ざけた。キリストの聖なるともしびをイスラムの家族に分けてやることなど許したくはなかった。

すると女はラニエロにいった。火を下され、巡礼の方。わが子の命こそは消えずに守り続けねばならぬ私のともしびなのでございます。」この言葉を聞くとラニエロはそのともしびから女のろうそくに火を移させた。

#### 四

峠をこえるとはるかかなたにフィレンツェの町がみえてきた。ラニエロはこれでこのともしびから開放されるのだ。これでまた軍に戻って大暴れが出来る。よその国へ攻めていつてたくさんの分捕り品を持って帰り、フィレンツェの町で大歓声と共に迎え入れられる。そういう生活に戻れるのだと考えようとした。しかしラニエロはこれらの考えではいつこうにころろが晴れないことに気がついた。ともしびを携えてのこの旅はラニエロを、荒々しく血なまぐさいものを遠ざけ、おたやかなもの、思いやりのあるものを求める人間に姿変えていたことにラニエロは初めて気がついたのであった。

#### 五

ラニエロがフィレンツェの町に入ったのは復活祭の前日であった。馬に後ろ向きにまたがり、ぼろぼろのマントを着、火のついたろうそくを手にしたラニエロを見るや、町の人々は口々に「パツォー、パツォー、きちがい、きちがい」とはやし立てた。ラニエロは群集には目もくれず、ひたすらともしびを守りながら大聖堂へと向かった。

大聖堂の中は厳粛な空気で満ちていた。大勢の司祭たちが祭壇にたち、キリストの十字架の悲しみのしるしとして祭壇のろうそくには火をともしぬまま、土曜日のミサが行われていた。ラニエロは大聖堂の中央に歩み出ると、エルサレムから聖なるともしびを携えてここに到着したいきさつを語った。そして祭壇のろうそくに火を移すことのお許しを求めた。

司祭はラニエロの偉業をたたえ、会衆の間にはおどろきの声が広がった。その時であった。

一人の男が司祭のところへ進み出ると、皆に聞こえるほどはつきりとした声でこう語った。

「ラニエロ殿がエルサレムから聖なるともしびを持って帰られた事はフィレンツェにとって大名誉なことでございます。しかしながら、このような不可能と思われる大偉業ゆえ、これが本当にエルサレムの墓でともしび、一度も消されることなくこの地にもたらされたという証拠、もしくは証人を今一度ご確認の上、それをここに集まりました一同にお示しさせていただきますよう。」

ラニエロは答えた、 せうして証人のあるはずがありません。 一人旅をして来たのです。 私をずっと見守っていたのは荒れ野と砂漠。 それがここへやってきて証言してくれるのならばともかく。」

いまや聖堂は大騒ぎとなった。 ラニエロは立派な軍人だからうそをつくはずはないと言う者、 いやいや、 奴はもともと大ぼらふきの目立ちたがりだ、 いんちきに決まっていると主張する者。 ラニエロはろうそくを高く差し上げていたが、 疲れ果ててがつくりしていた。 いくらここで真実を主張しても、 それをあかしするものは何もない。 ここまでともしびを消さずに携えてきた事はもはや何の意味もないのだ、 そう考えているようであった。 この男のひとことで広がった疑いのころは、 聖なるともしびを消し去ってしまったのだ。 ラニエロはそう思った。

小鳥が 一羽、 開いたままの聖堂の大とびらを抜けて舞い込んできた。 鳥はまっすぐにラニエロのともしびめがけて飛び、 ラニエロが手を引く間もなくそのほのおを消し去ってしまった。

ラニエロの腕が落ちた。 その目には涙がにじんできた。 けれどもその時、 ラニエロにはこれでよかったのだと感じられた。 人間どもの手にかかるよりは、 あるいは聖壇のろうそくにともしぶことを許されず結局自分の手で消すことになるよりは、 この方がよかった。

その時、 高い叫びが聖堂にこだました。

鳥が、 鳥が燃えている。 羽に聖火がもえついたぞ！」

小鳥は苦しそうにさえずり、 大聖堂の丸天井の下を2、 3度ひらめくように羽はたいた後、 まっすぐに聖壇に向かつておちていった。

しかし、 鳥が祭壇に落ちたその瞬間、 そこにはラニエロが立っていた。 聖堂をつきつて来たのだった。 何ものもそれをばばむことはできなかつた。 ラニエロは鳥のつばさを焼き尽くした最後の火で、 聖壇のろうそくに点火した。

司祭はその杖をあげて叫んだ。 みむねじや。 神さまがあかしを立ててくださったぞ。」

聖堂にいたすべての人々は、 ラニエロを慕うものも憎むものも、 そのころから疑いをすてた。 みな神の奇跡にうたれて口々にさげんだ。

みむねだ。 神様があかしを立ててくださったぞ。」

六

ラニエロについては、あとはただ、彼が残る生涯を通して豊かなさちにめぐまれたこと、そして賢く哀れみ深く生きたことが伝えられている。けれども、フィレンツェの人々は、ラニエロがキチガイ扱いされたことをたたえて、そのうち彼をパッツォ・デグリー・ラニエロと呼ぶようになったということだ。

ラニエロが運んできたこの奇跡に励まされ、そのうち多くのともしびの担い手たちが苦しみ、耐え忍んで、暗い時代に光をもたらしたことについては、もはや多くをかたるまい。この光によって成しとげられたものは、これを計ることも数えることも出来ないからだ。